

【目的】高齢者の健康の維持には、適切な食生活を実践できる咀嚼能力をもつことが望まれる。既に面接調査結果から、加齢やかみごたえ度の高い食品になるにつれて咀嚼できる者の比率が低下することを報告したが、今回は咀嚼能力を主として数量的に検討した。

【方法】岡山市及び周辺の、主として高齢者施設に在園あるいは医院に通院する高齢者（65歳以上）262名（男71名、女191名）を対象とした。歯の現状、かみごたえ度の異なる10食品に対する咀嚼の可否の自己評価について面接調査を行ない、また、咀嚼能力はチューインガム法を用いて溶出糖量により判定

した。咀嚼能力については、比較のため成人女子101名についても測定した。

【結果】1)高齢者の溶出糖量の平均値は 0.48 ± 0.32 g、成人女子では 0.88 ± 0.17 gであり、成人女子の約55%で、両群の間には有意差が認められた ($P < 0.01$)。2)高齢者の5歳刻みごとの溶出糖量は加齢につれて明らかに減少した。3)歯の状態により溶出糖量は異なり、天然歯と局部義歯 > 総義歯 > 無歯顎の順に減少した。4)義歯使用感を良とする者では溶出糖量が平均値以上の者の比率が高く、否とする者では低い傾向が認められた。5)10食品の各食品を噛めると回答している者のうち、溶出糖量が平均値以上の者は約50%で、残りの者は噛めると回答しているにも拘らず溶出糖量は平均値以下であった。6)日常生活で周囲の人の手助けを必要とする者の溶出糖量の平均値は、必要としない者のそれと比較して有意に低く、自立的に日常生活を送れる者では咀嚼能力も高い傾向のあることが推察された。